

パンと魚の奇跡



ヨハネの福音書 6:5～13

イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。

ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」

イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。

そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた。「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。

弟子として信仰の訓練

「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」・・・イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。(ヨハネ6:6)

イエスさまは私たちを弟子として、日々の生活の中で、課題を与え、信仰の訓練をされます。

ここでは、ピリポはテストに合格しませんでした。「主よ。あなたでしたら、何でもおできになるはずです。」と言えは良かったのですが、その代わりにお金を数えていました。

そろ盤(電卓)をはじいてそれをもとにして物事を判断するような、ピリポは非常に現実的な考え方をするタイプのひとりと言えます。要するに彼は、「どんなことをしたって、これだけの人々にパンを与えることは不可能です。」と答えたわけです。

弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」(ヨハネ6:8-9)

アンデレも、テストに不合格です。この少年を連れて来たこと自体、あまりもばかばかしいと言わんばかりです。

理性、常識から信仰へ

ピリポは理性、常識での判断をしました。しかし、イエスは彼らを「信仰の世界」へと導かれます。「人々をすわらせなさい。」と挑戦したのです。

信仰の世界、聞いて従う世界、理性では考えられない世界へのチャレンジです。「人々をすわらせなさい」というのは、イエス自身が目の前にいる大勢の人々にパンを与えるという宣言です。

モーセのカナン占領失敗

主がこの地をあなたの手に渡されている。だから、上って行ってそこを「占領せよ」と言われているにもかかわらず、民たちが、こぞって、その前にその地を探り、その報告を待ち帰らせましょう」と民が提案したことがあった。モーセ自身もこの提案は常識的な考えと思ったようです。

一見、常識的な発言の中に、神を退ける心、不信仰の思いが隠されていることがあります。神がカナンの地をすでに与えた(完了形)と約束されているにもかかわらずです。

真の信仰とは、神がすでに私たちに与えてくださっているものを素直に受け取り、それを「占領する」ことです。

小さなもの

「五つのパンと二匹の魚」というのは、本当にわずかなもの、小さなものの象徴と言えます。ヨハネはパンをただのパンとしないで「大麦のパン」と書いています。小麦のパンではなく、大麦で作ったパンは最低の質のパンという意味です。そのようなものでも、ひとたび、イエスの手の中にささげられるとき、イエスはそれを取って祝福されました。少年がささげたものをイエスは祝福され、大勢の者たちが満腹できるほどの必要が満たされたのです。



現代の風潮

現代の風潮として、小さいこと(少ないこと)は軽く見られ、大きいこと(多いこと)は価値あることとしてみられ、もてはやされる時代です。少数意見はなおざりにされ、多数の意見がいつも正しいかのように判断される時代です。地味なことよりも、派手やなにことがもてはやされます。地方よりも都会へ、貧しいことよりも富むほうへ・・・、またできるだけ早く、できるだけ大きくなることへ人々は駆り立てられています。

イエスの手に明け渡されるとき

少年が自分の持っていた「五つのパンと二匹の魚」をイエスの前に差し出すことがなければ、それはそれだけのものです。ペテロやパウロという使徒たちでさえも、自分の力で奉仕しているときは無力でした。しかし、イエスの許に行き、イエスにすべてを明け渡したときに、はじめて神に尊く用いられました。



何十倍、何百倍にも

たとえ、人の目には小さなもの、わずかなもの、それが何の役に立つだろうと思ったとしても、自分に与えられているものをイエスのものと差し出すとき、イエスはそれを何倍、何十倍、何百倍にも増して用いてくださるというのが、この奇跡が教えていることです。

「これがない、あれもない」ということを問題にするのではなく、「今、自分に与えられているものを知り、それを感謝して、それをささげるとき、私たちが考えも思いもよらなかった世界が開かれてくるのです。私たちが頭から不可能だと思い込んでいることでも、主の手に明け渡すとき、不可能が可能になる世界があることをイエスはこの出来事をおして私たちに教えようとしたのだと思います。

地に落ちて

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。(ヨハネ12:24)



ここには、イエスご自身が自分のいのちを「一粒の麦の種」にたとえて、それをささげることが記されています。「死ぬ」ということは自分を主にささげるということです。

自己中心的な種の殻が破れるとき、そこに新しいいのちが芽生えます。そのいのちの芽生えは神の愛のいのちの芽生えです。その芽は神が注がれる力によって成長し、多くの実を結び、多くの者にそれが分かち与えられるのです。

ただそのためには、自分(たとえどんな貧しくても、何の力や能力がなくても)差し出すことです。「それをここに持ってきなさい」という主の声に聞き従うことです。

そうするなら、神の栄光が現わされるのです。「五つのパンと二匹の魚の奇跡」はそんな世界に私たちを招こうとしています。